東方宵闇帳

小箱はと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方宵闇帳

【Ｎコード】
Ｎ９３８３Ｆ

【作者名】
小箱はと

【あらすじ】
気がついたら幻想郷に飛ばされていた、主人公。そこで手始めに妖怪に喰われそうになる。そこをなんとか回避し、以降その妖怪にお世話になる。「さて、今日はどんな騒ぎが起こるんでしょうねぇ」（ｂｙ射命丸文）ヒロインは多分ルーミア。文も出したい。

一ページ目（前書き）

この作品は東方プロジェクトの二次創作です。
不快感を感じる場合、それをあらわにせず優しく微笑みながら戻る
を連打してください。
では受け入れてくれる皆さん。
ゆっくりしていってね！！！

一ページ目

ここは、何処だろ？
周りには森。少し、薄暗い。
服装は黒のジーンズに赤いTシャツ。それに濃い……いや、渋いと言う方がしっくりくる。そんな緑のベスト。
その中のポケットには、一振りのナイフと文庫本。どうやらラノベらしい。マテ〇アルゴー〇トと題名があった。何故ラノベ？それなら、他の物が欲しかったよ。
この場所がどこだかわからない。昨日は明日テストだからと早めに寝たはずだ。なのに、何故見たこともない場所、それも外に？（持ち物もおかしいし）
場所的にウチ（割と地方のそれなりにデカい都市。そのなかの住宅地）の近くだとは思いにくい。こんな自然豊かなところないし。
「取り敢えず、歩いてみるか……」
行動して、どこかの街やら村やらに出れる筈と思い、歩き出した。
此処は日本　（のはず）。アメリカじゃあるまいし、すぐ抜けられるだろう。

もう、どの位歩いただろうか？
いくら、学校が山の上にあって、毎日坂を上り下りして体力に（とても少し）自信がある俺といえども、流石に二時間歩き詰めは疲れる。
「ふぅ……」
足もガクガクとなってきたので近くにあった岩に腰掛けた。む、俺専用のようにちょうどいい高さの岩だった。
其処は自然に溢れていた。二時間も歩き回ってわかったことはそん

なもん。
聳える岩壁。生い茂る木々。流れ落ちる滝。どれも優雅で、壮大なスケール。まだ日本にこんな所があったのかと、本気で驚いた。
どうやら近くに村とかはないようだ。
あと、目についたのは見たことのない鳥がいた。それだけ。情報なし。

「ねぇ」
風景も綺麗だし、カメラがあれば写真を撮ってみたい。つうか携帯もってりゃよかったのに。俺みたいな素人じゃ大したものは撮れないだろうが、個人的に年賀状にでも使えただろう。
「ねぇ」
それとどうやら此処はいま、秋……いや、夏と秋の境目位だ。多分。おかげで過ごしやすい。夏なら汗だくだろうな。
「ねぇってば」
だが、それで少しおかしい事に気がついた。やはりウチの近くにこんな所は無い。
ウチは本州のかなり北の方に位置して、こんなに暖かくない。
まさか誘拐？いや、ならあんなとこに置いとく意味が無い。もしかしてこの森は出られないようになってるのか？確かにそれなら
「ねぇってば！もしかしてわざと？」
「うぉおぅ！？」
後ろからいきなり人の声がした。まさか、俺を連れ去った犯人か！？
「やっと気づいた。初めまして。私はルーミア、貴方は食べていい人間？」
周りは、いつの間にか、真っ暗になっていた。

二ページ目（前書き）

これは東方プロジェクトの二次創作です。
それが嫌い。原作すき。などの人はなるべく読まないように。
キャラはなるべく壊さないようにしてないです。多分恐らく。

二ページ目

「貴方は、食べていい人間？」
は、何をいっているんだ、この娘は。
女の子の格好は白の服のうえに黒いベスト、それに黒いスカート。
それで金髪。髪を縛ってるのか、リボンがみえる。
なんていうか、真っ黒。
ともあれ、とりあえず反論だ。こんな娘に共食いの世界は知ってもらいたくない。
「とりあえず言っておこう。俺はカニパリズムを推奨しない。あれだぜ、人間って酸っぱいらしいぜ？」
これは、うちのひい爺ちゃんから聞いたこと。なんでも、戦時中は味方を食糧にすることもあったらしい。
そんときのひい爺ちゃんの感想だ。
ん、ひい爺ちゃんは生きてるよ。９０過ぎてぴんぴんしてやがる。
どんな化けもんだ。
「う～ん、そうかなぁ。私はとてもおいしいと思うんだけど」
すでに喰ったことがあるようです。
きゃー、殺人鬼だ～。って！！？
「それと、カニパリズムって何？よくわかんないよ。……って大丈夫？顔色悪いけど」
「いや、大丈夫だ。カニパリズムのことだったか、あれは意味的に人同士の共食いだな、多分」
努めて冷静でいられるようにする。
もしここで大声とか出したらすぐ殺されるだろう。昼ドラとか火サスとかはそうだし。
……だが妙だ。
この娘……たしか、ルーミアと名乗ったか。両手を拡げているのだ。
この体格で、武器も持っていないようだし、どう殺すきだ？

本人も「そーなのかー」とか笑顔でいってるし。
まぁ、その笑顔が怖いんだけどね！
「じゃ、最後に聞くよ？食べて、いい？」
ちっ、本当にどうする？本当に俺を殺すつもりなら追ってくるだろうし、下手に手だして武器もってたりしたらやばい。だが、多分……今なら！
「答えは……」
今まで座っていた岩から、腰をわずかにあげ、足に力をこめる。
「答えは？」
ルーミアが復唱する。おそらく彼女の中で俺が答えることは、もう決まってるんだろう。
だけど、あえてここは。それを裏切るような行動を。
「こいつだっ！」
自分からルーミアに突撃する！
俺と彼女の距離は約一メートル。十分タックルを仕掛けられる距離だ。
俺はこのままルーミアを吹っ飛ばして逃げるつもりだった。
体制を崩してやれば隠れて逃げるくらいはできるだろう。
だが。
「わぁ、予想外の答えだね。今までこんなことしてきたの、貴方だけだよ」
俺のタックルは、いともたやすく受け止められてしまった。
「は、え？」
「じゃあ、さようなら。また来世にでも」
ニコッと笑ったルーミアの笑顔を最後に、俺の意識はとぎれた。

俺が目を覚まして、見たのは見慣れた天井だった。
「あぁ、よかった。夢か」
どうやらそうらしい。まくらもとのイルカ型の時計に手を伸ばした

ところで、

「……した……れ」
「…べ……と……ら、れい……じゃ……ない」
「か……の……で……いよ」
「…あ、……た…事情聴取ってことで」
ん、むぅ……。起きたら見慣れない天井だった。
どうやら夢ではなかったらしいが。なぜ食べられてないのだろう。
どうやら、食われてはないのかな？
「ん、なんかいい匂いがする」
俺は料理らしきその匂いに反応し、体のばねをフルに使って飛び起きた。
まぁ、実際上半身を起こしただけだが。どうやら俺は布団に寝かされていたらしい。
どうやら、和室のようだ。掛け軸とかあるし。
「あ、起きたぁ。霊夢～、こいつ起きたぜー」
「何その起きてほしくなかったみたいな」
声の主は俺の隣にいたらしい。
とりあえず、反論してみた。
「おぉ、そんだけ言えれば大丈夫だぜ。かなり元気じゃねぇか」
隣にいたのは白と黒が基調の服を着た金髪の女の子。黒い帽子をかぶっていた。
年はたぶん同じくらい。
だけどその唾の広い帽子は……
「魔法使い？」
「おお、よくわかったな。って言ってもこんならしいカッコしてればわかるか」
そりゃあね。
それで町出て見、超めだつと思う。

「あんた、誰？それとここどこ？」
そういえば遭難中だったなと思い出す。
折角人に会ったんだ。とりあえず訊いといて損はないはず。
そうすると少女はいきなり立ち上がり、

「よくぞ、聞いてくれた！私は霧雨魔理沙！気軽に魔理沙とよんでくれ！」

大声で名乗りをあげてくれた。他の部屋……いい匂いがするほうから……
「魔理沙、うるさい！」と聞こえてきた。
だが魔理沙はそれを無視し、
「お前の名前は？」と聞いてきた。
いいのか？それでいいのか？
とか思いつつも先ほどの声をスルーし自己紹介をした自分がいる。
「そうだな、とりあえずイッセーとでもよんでくれ」
実際本名は名乗らなかったが。
え。魔理沙のようにしなかったのかだと？
するわけないし、そんな度胸はない。
「イッセーか。んむ、なんで本名名乗んないの？」
いつの間にか羊羹食ってるよ、この魔法使い。
「ん～、いや、あれだな。記憶喪失？エピソード記憶の欠落？」
俺はとっさに嘘をついた。
なんていうかあれじゃん？教えたら呪われそうじゃない？
（間違った魔女のイメージ）
「ふ～ん、……嘘だろ」
効果音
一瞬で見破りやがりましたよ。この魔法使い。
「む、当たったか？図星？図星かこの野郎」
ちっくしょう、かくなる上は！

「うん。嘘だ。でも名前は教えない」
少し開き直ってみた。魔理沙はやっぱりという顔をしていた。
「どーやら、なんか本名出したくないみたいだな」
うんうんと縦に激しく頭をふって答える。いや、もうブンブンとふった。
「なら無理にとは言わないぜ。ここは博霊神社。まぁ、汚い所だけどゆっくりしていってね！！！」
「あぁ、そう言ってくれるとありが……」
「あんたの家じゃあ無いでしょ。ここは私の家」
さっき、他の部屋からしたこえが近くからした。
別に俺のセリフにかぶせなくてもいいじゃん……などと思ったり。

三ページ目（前書き）

やばい、キャラ崩壊が目立ちます。これが東方二次創作のサダメなのか？（いや、あんただけです。）

三ページ目

「あんたの家じゃあ無いでしょ。ここは私の家」
「ああ、そうだったな。まぁ、結局どうでもいいだろ。そんなこと」
うわ、家主とか色々なことを一蹴したよ、こいつ。
突如セリフを遮り現れたこの少女。
第一イメージは……

「……巫女？」
だった。だってさ、巫女服きてるんだもん。それ以外無くね？
年の頃は同じくらい。黒髪の純日本人。うん、まぁ可愛いヨ？
でもその服、なんで腋のとこだけないの？
「うん、私は博麗霊夢。ここの巫女やってる。はい、お茶」
そう答えてくれた、彼女。ここの主らしい。あとお茶もらった。
どうやら俺は布団に寝かされていたのではなく、炬燵（出しっぱなしであろう）に寝かされていたみたいだ。
魔理沙が「私の分はどうしたんだぜ～？」と騒いでた。
二人で無視してお茶啜った。おいしい。日本に生れてヨカッタ。じゃなくて。
あれ、神社の最高権力者って巫女だっけ？
神主は？と聞いたら教えてくれなかった。訊かれたくない事情があるのだろう。
そんなで三人でお茶を啜っていると（魔理沙いつの間にお茶を？）、
「ふ、お前が思っていたことを当ててやろう」
魔理沙がなんか言い出した。
「へぇ～、よかったですね～」
投げやりな反応をかえす。なんだか扱いがわかってきた。
「って、興味無しか。いいや、とりあえずいっとくぜ。
……なぜ腋がないかだ！」

飲んでいたお茶を吐きそうになった。
「ふっふっふ。わかる、わかるぜ、お前の思考。確かにな。謎だもんな。教えてください魔理沙様と言えば教えないこともないぜ」
くっ、それは確かに気になる。だが、頭を下げるのは……
「あー、この魔理沙（馬鹿）の言うことは無視して」
「教えてください！魔理沙様！」
「って、えぇ！？」
ごめん、その服見たら反射で……（泣）あれじゃん、男の習性？悲しい性？
「ふふ、そうだよなぁ。気になるもんなぁ。なら、教えてしんぜよう！」
「ありがたくお受けいたします！」
隣で霊夢が「なによこれ……」とため息ついてるが気にしない。
「そうだ。その理由とは――――私も知らない」
俺と霊夢はずっこけた。

「ねぇ、そろそろ入っていい？」
俺たちがいる部屋の外、襖のとこから声がした。
ちょうど霊夢が二杯めのお茶を淹れてくれてるときで、
聞き覚えのある声にびくっとなった。俺は危険を察知して部屋の隅へ移動。
「あ、忘れてたわ。いいわよ、ルーミア」
「お邪魔するね」
「ゆっくりしていけ～」
（がくがく）
それぞれの反応。誰がどれだかは分かるだろう。
上から霊夢、ルーミア、魔理沙、俺である。
「あ、イッセー逃げるなだぜ。別にとって喰われりゃしねえんだから」
いいえ、一回喰われかけてます。

「大丈夫よ？私たちがいるし」
頼もしいッスね、貴方達。
「そーなのかー」
そーなのだー。

まず、今までのことを整理してみよう。
１　俺、生まれ……って、遡り過ぎた。
気を取り直して。
１、森の中　（問題点１、２）
２、ルーミアに喰われかける。　（問題点３、４）
３、ここにいる。　（問題点５）
みじかっ。
とりあえず気になることを問題点として挙げてみたが……
１ここ、どこ？未だにわからず
２どうやってきたの？俺。
３タックル受け止められた。ルーミアって女で俺よか小さいぜ？
４喰われなかった。……多分魔理沙たちが助けてくれた。
５此処と霊夢と魔理沙について。仮に追い払ったとして、どのような手段で？
ルーミア《あいつ》は男（身長１６８くらい）の俺のタックルを受け止めたんだぜ？
って、感じか。一つ一つ解決していこう。
２は分からないだろうけど、他はこのメンバーに聞けば物足りる。
とてもやな予感もあるけど。

「ねぇ、霊夢」
「ん、何？えーと」
「イッセー。そう呼んで」
「わかったわ。それでイッセー、なにかしら？」

現状一番信用できる巫女に話をきいてみる。魔理沙？しらにょ。
「此処ってさ……いや、この世界ってどこなの？」
瞬間、周りの空気が凍ったきがした。
「それって、どうゆう事だぜ？イッセー」
魔理沙が話にのってきた。ちっ、ちょっとやり難くなった。
「だってさ、此処に来てから。俺と同じような、俺が当たり前だと思ってた服を着てるやつがいないんだぜ？」
「確かに貴方のような服装のは、殆ど居ないわ」
巫女が相打ちをうってくれた。
「さらに、俺がいた場所のような建物がない」
「建物って、どんな感じだぜ？」
「洋風のような……和風のような、はいぶりっと？」
「へぇ、ちょっと家に和室造りたくなったぜ」
「ちょっと魔理沙、それで家の畳もっていかないでよ？」
「持ってかないぜ。香琳堂にでも行けばあるだろう？」
「そうね、でも……」
「あの、お二人さん？ちょっといいな？」
このままだと元の路線に戻らなそうなので、一声かけると、二人は
「あ、どーぞ」と話をやめてくれた。
「それで、思ったんだよ。ここ、どこかなって」
はぁ、と巫女はため息をついて。教えてくれた。
曰く、ここは幻想郷。外の世界……つまり俺がいた世界で幻想になったものが来るらしい。
その中で最も足るものが妖怪。幻想郷では人間より妖怪のほうが多いらしい。
霊夢と魔理沙に君たちは？と聞いたら
「妖怪か？って？そんな訳ないじゃない」
「そうだぜ、私はただの魔法使いだぜ」
と答えが返ってきた。ルーミアは妖怪って見当がつく。人を食おうとするんだもん。

一人だけ質問されずに、寂しそうだった。そういえば話にも加わってこなかったし。

この質問で疑問が二つ片付いた。
1と3。ルーミアが妖怪ならもともとの性能(スペック)が違うからだろう。
「じゃぁ、次はルーミアに質問」
え、私？とでも言うかのように自分を指差し首をかしげて俺をみた。
「当たり前だ、お前も当事者だろうに。んで、何故俺を食おうとした？」
「あ、そうね。私は夜中歩いている人間なら食べてもいいといったけど」
おいこら。普通に危ないじゃないか。幻想郷(ここ)。
霊夢もっとしっかり注意しとけよ。
「ん～と、実はね」
「実は……？」
少し重大そうに話しだしたルーミアに、三人ともほんのちょっと身を乗り出してきく。
「自分の能力が暴発して、周りがかなり暗くなってたんだよ。それで夜中と勘違いしてさ」
ルーミアははは、と『やっちゃった』みたいな顔で笑う。
三人ともちゃぶ台に頭ぶつけた。

四ページ目

「……ん、能力？なんだそれ」
会話の中に聞きなれない（いや、意味は知ってるよ？）ワードがあったから質問。
「ああ、まだ話してなかったっけ？」
霊夢ってば一番重要なところ話してなかったの～？とルーミアが言うが霊夢と魔理沙はどうやらちゃぶ台だけでなくお互い頭をぶつけたらしい。
まだ「うぉぉおお」とかやってる。大丈夫だろうが、心配だ。
「あのね、私たち幻想郷の住人……おもに妖怪は能力をもってるんだ」
完全にスルーしたね、俺もだけど。
「ふ～ん、なるほど。んで、ことの発端になったお前の能力って何さ？」
「……驚かないんだね、たまに迷い込んだ人に話したりするけど」
話されたひとの運命は聞くまでもないか。直行便だな。
「ここに来た時点で驚きの残機なんてねーんだよ」
ボムも全部つかったわ。
「ん～なるほど。おもしろいね、貴方」
「そりゃどーも、一応聞くがどっちの意味だ？」
「もちろん、どっちでも」
「そうか。ありがとう」
「って、あんたたち何勝手に話進めてんのよ？」
「置いてきぼりは好きじゃないぜ？」
巫女と魔法使いが復活した。
だれだ、フェニッ○スの尾つかったの。
「……話をもどそうか、ルーミアの能力って？」
脱線しすぎだ、何でフェ○ックスの尾まで話が行ったんだろう。

……こんなに楽しい話も久し振りだったからだろうか。
前は人と話をしない方だったから。

それより、今は今のことに集中しなければ。
「ああ、ルーミア〔このこ〕の能力はね、闇を操る程度の能力っていうの」
「なんだそりゃ。随分かっこいいじゃねえか」
なんだ？今俺の脳内にはとてもカッコいいルーミアがいるが。
［脳内イメージ］
「ふはははは！！私の闇に勝てるものなどいない！さぁ、すべてを食らえ！この世界を闇で覆い尽くすのだ！！」
［脳内イメージ終了］
「いや、大したことじゃないぜ？こいつのはせいぜい周りを暗くするくらいだ」
「ただ、私暗い所だと目が利かないんだよね」
それで能力発動中に木にぶつかったりするんだよね～と、頭をかいたルーミア。
脳内イメージ総崩れだ。畜生め。
「でも、まぁ、厄介な能力ではあるのよ」
「確かに俺ら〔にんげん〕は視界に頼ってるからなぁ」
つぶされたら大変だ。なんもわかんなくなって混乱してるうちに、ルーミアに喰われるだろう。
「まぁ、私たちは霊力やら魔力やらで補足できるんだが」
・・・こいつらは本当に人間なのだろうか。

～その他説明中～

「ほんとにここはなんでもアリだな・・・、宇宙人、未来人、超能力者がでてももう驚かない自信がついた」
「そりゃどうも。残念だがそいつらに心当たりはないぜ」

「宇宙人なら二人いるでしょ、宇宙生物なら三匹にふえるけど」
「その辺はよくわからないなー。交友関係広いわけでもないし」
いるのか、少なくとも宇宙人はいるのか。ていうか宇宙生物って、あの、映画とかの無駄にグロいの？
「んじゃ、今日はここに泊って行きなさい。これからどうするかも決めて、明日に言ってちょうだいね」
霊夢から神社宿泊の許可をもらい、部屋に案内された。こぢんまりとした部屋だったけど、今の自分にはすごくありがたい。ここは安全が保障されるのだから。
そのあと魔理沙が「私も泊っていいか！？」と目をキラキラさせて霊夢に頼み込んでいたのを目撃してしまった。見て見ぬふりをして即刻にげだしたが。

その夜
魔理沙は結局泊っていくらしい。霊夢が折れたようだ。俺は縁側であしを投げ出して涼んでいた。
「隣、いい？」
「いつでもフリーだ。料金は今ならただが毎日続く」
「それはいつでもって言うことでしょ？」
素直じゃないなぁ、と言いながら隣に座るルーミア。こいつにももう慣れたものだ。
「お前はどうすんだ？やっぱ自分トコに帰るのか？」
「いや、霊夢が今日は泊ってもいいって。何人泊めるのも一緒とか」
あの腋巫女がそんなに簡単に？いや彼女も優しいところがあるのだろう。そう信じたい。絶対何もないなかったらいいな畜生絶対何かある。
「貴方は大丈夫なの？私と一緒で」
人食い妖怪だから、という意味だろう。もう夜しか食わないということは知っているし、この神社にはまだ人がいる　（妖怪じみてはいるが）。

「ん～、大丈夫かな。こんな感じで話せてるし」
なによりもそれが証拠。すぐ食われても別におかしくないのにこうやって話してるから。
「・・・ふふっ」
ルーミアは少し面食らったあと、ほほ笑んだ。
「なに笑ってんだよ。こっちが恥ずかしくなるだろうが」
「いや、そんなの初めて言われたし・・・面白くて。貴方の考え方が」
面白い、か。確かにそうだ。こっちの世界で言ったら丸腰で銃構えてる人にまっすぐ歩いていくようなもんだ。普通じゃない。
「おーい、そろそろ夕飯にするわよ？」
霊夢の呼ぶ声がして、捕食者（ようかい）と食糧（にんげん）の話はここで中断された。

五ページ目

「う、ぐぉおおえぇぇ」
「これは・・・まずいぜ・・・」
今俺たちはピンチである。なぜなら。
「あれ、もうギブアップ？だらしないわね」
「ほらもっと食べておかないと、バテるよ？」
夕飯（せんじょう）だからだ・・・・・・！

時間はしばらく戻る。

霊夢に夕飯が出来たと知らされたところから。
「ご飯できたみたい。行こう？」
「そうだな、冷めないうちにパパッといただいちまうのがメシを美味く食うコツだ」
なにそれ～、いや本当だから、などと会話をしながら霊夢の声がした方に歩いて行く。
その途中の曲がり角で魔理沙と合流。魔理沙は別方向の部屋らしい。
それでルーミアに「お前の部屋ってどこ？」って聞いたら
「なんか霊夢が後でだって言ってた。なんでだろうね？」
この神社は無駄に広い。いらないくらい広い。使ってない部屋なんてわんさかあるだろうに。簡単に決められるだろうに。
その謎も解けないまま、俺たちは夕飯がある部屋へと着いたのだった。
それで、料理がある部屋の扉をひらくと
「あら、遅かったじゃない。もう準備は万全よ？さぁ座ってすわって！」
年中出しっぱなし（だと思う）コタツと、その上に鎮座する季節はずれな鍋があったのだった・・・！

「うお、霊夢がまともなもん出すわけねぇとおもったがこれは予想の斜め上だぜ」
かなり親しい様子の魔理沙さえ驚いている。そりゃぁこの時期に鍋って・・・。
夏まっさかりや秋深まってきたころなら分からなくはない。前者は我慢大会っていうか暑いときには熱いお茶を理論だし、後者は実り豊かでおいしいものがたくさんあるからだろう。
でもさ、正直このちょうど間に鍋ってどうよ？どっちもないぜ？しかもコタツまで完備してやがる。
完全なる冬装備（パーフェクトカモンウィンター）。これはひどい。
「いやー、ちょっと食材がたくさんあってさ。ほっとくとまずいから、全部ぶちこんだって訳」
「全部っ！？」
「いや、食べられそうなモノしか入ってないからね」
ほ、本当かよ・・・？危ないものとか・・・。何が入ってるんだろ・・・。
「ねー、霊夢、このなんか吠えてるのってなに？」
・・・やっぱり危険物のようだ。

それで冒頭の状態に戻る。途中
「おい、これなんだ。明らかに食材な魚じゃないぞ」
「あー、それはヤツメウナギだぜ。ここではメジャーな食材だ」
「・・・ぐろいな」
「うおあっ！？調味料固まってる！」
「あ、あたりじゃない。食べてみなさい」
「絶対体に悪いぜ・・・これ」
「お、しっかり肉も入ってるじゃないか」
「それ、ルーミアが持ってきたのよ」
「「・・・・・・」」
「ん？どうかした？」

「ルーミア、これなんの肉なんだぜ？」
「その辺でとったイノシシだよ」
「「・・・・・・（疑いの目）」」
「これ、もしかして･j」
「こまけぇこたぁ気にスンナ！（ドゴッ）」
「イッセーーー！！？？」
などがあって。
冒頭の状態にいたるのです。

「うぐお・・・魔理沙、戦況は・・・？」
「む・・・もう、無理」
「なに馬鹿やってんのよ」
霊夢の冷静な突っ込み。いやマジでヤバイんだって。
まず、鍋の大きさがおかしいもん。なんでふつうのより一回り大きいのさ。
霊夢、君は一人暮らしのはずだろう？
そして中身。幻想郷ではメジャーなものもはいってるみたいだが、俺にとっちゃゲテモノもいいとこなのがたくさん。
魔理沙も驚くような食材も入ってるらしい。闇鍋明り付き状態。
「まぁ、ルーミアが頑張って食べたし。中身もうないけどね」
「早っ！？」
しばらくだまってたと思ったら黙々と食ってたのか！
てか大食いだなお前！結構残ってたはずだぞ！
「食べられるときに食べとかないと死んじゃう世界だから」
・・・ごめん、普通にギャグ的な理由だと思った。
「じゃぁ、これで夕飯はお開きってことで。イッセー、先に風呂入っていいわよ」
「あ、俺着替えないんだけど」
「こんなこともあろうかと」
「魔理沙、どっから持ってきたそれ」

「森の近くの古道具屋だぜ」
「・・・まぁいいわ。入ってきちゃいなさい、イッセー」
「そうさせてもらう」
ここまで用意が出来ていたら、ご厚意に甘えさせてもらおう。

五ページ目（後書き）

さて、お風呂でなにかやるか。やらざるべきか。
なにかご意見あれば感想まで

六ページ目

「ふぅ……」
風呂に入って一息つく。思えば幻想郷に来て初めてゆっくりくつろげたかも知れない。
「色々……あったな。今日」
気付いたらココに居て、食われかけて、助けられて。
いつもの生活からかけ離れた時間。楽しくもあり厳しくもあり辛くもあり、なによりも。

「なんか、落ち着ける場所なんだよな……」
自分の家や学校に居づらさを感じていた訳じゃない。むしろ心休まるところだった。
けれどここはそうなんじゃない。自分が芯まで落ち着いている、そんな感じがするのだ。
「なんでだろうな、いつも居る所より落ち着くってのは」
ほんと、なんでだろう。

ガラガラッ
んあ、霊夢か魔理沙が服とどけに来たのかな？ココ来るところで渡してもらえなかったし。
ついでにタオル……ここでは手ぬぐい？置いてってもらうと助かるが、多分持ってきてるハズ―――。
「やっほーイッセー」
なんであんたが浴場まで入ってきてるんですかルーミアさん。

「んー、どうしたの？まさか私に見惚れた？この変態っ」
「んなメリハリすらない体に欲情するか、もう少し成長してから言えがきんちょ」

「食べるよ？」
「ごめんなさい」
そんなやり取りがあってから、ルーミアは体洗ってから風呂に入ってきた。どうやらこの辺の作法はわかっているようだ。
で？まだ解決してないんだが。
「なんでルーミアが入ってきてんのさ」
コイツホントなんで入ってきてんの。男だよ俺。妖怪でも完全に女だよこいつ。
「霊夢が入ってこいって言うから、はいってきたんだよ」
「そうかあの腋巫女か」
あとでとっちめよう。いややっぱ無理。強そうだし恩があるから。
「まぁ、問題はないでしょ？別にナニがあるってわけでもなしに」
別に襲うわけないでしょ？と彼女ははにかみながら言う。
「さっき言ったろ。欲情すらできない奴なんておそわねぇよ」
「ひどいなぁ、私もオンナノコなんだよ」
「そーなのかー」
「食べていい？」
「マジ勘弁」
こんなやりとりしてるといつのまにか体がのぼせ始めた。そろそろ上がりどきだろう。
ざばぁっ、と風呂からあがって、脱衣所に歩いていく。
……ん？今なんか頭にピキーンと来たぞ。
ルーミアはまだ風呂に入ってて、俺が出たのには目を瞑っていて気付いていない様子。
俺に「出るの？」とも訊いていないから多分出ることにだれも気付いていない。
脱衣所……霊夢が仕組む……なるほど、ふふふ。
俺は一転して風呂に引き返して、ルーミアに声をかけた。
「ルーミア」
「んー、いい湯だーなー」

「ルーミア」
「にーんげーん煮るにゃいい湯ーだーなー」
「オイコラ」
「ふぁ、なに？イッセー」
「ちょっといいか？」
今から少し声の大きさ落とせ――――

「んー、予想通りっていうかなんも起きないわねやっぱり」
「そりゃそうだろ。ルーミアだぞルーミア。ありゃ無理だから」
「それもそうねぇ」
霊夢たちは脱衣所で聞き耳を立てていた。
なんか面白くなりそうだから、と霊夢がルーミアとイッセーを一緒に風呂にいれたのだ。
だが大方の予想どおりなんにも面白いことにはならず、こうして飽きてきているのだった。
「じゃぁ、そろそろ戻りましょうか？」
「そうだな、ばれたらまず――――ッ、霊夢！」
「どうしたのよ魔理沙……」
「キタ、ぜ」
「ッ、本当に！？」
ぜったいにあり得ないと思っていた。それだけは絶対にないと。
そして扉に耳を付けて、体重をかけたところで
「ビンゴ。やっぱ聞き耳立ててやがったこの二人」
扉があいて、欲情の床に頭を打ち付けてしまった。

「で、今回の所業はどういうわけなのでしょうか、お二方？」
正座。それは日本に昔から伝わる座り方である。正しい座り方とかいた通り改まっての場所などに用いられてきた。そして、すごくつらい座り方である。

それを俺は二人の少女に強いているのだった。
……この一文だけだとなんか鬼だなおれ。
それを俺は二人の少女に強いているのだった。
うわ、ひでぇ。
じゃなくて、こいつら……霊夢と魔理沙なんだが、ホントなにやってたんだ。
「わ、私は悪くないぜ！全部霊夢が悪いんだぜ！」
「ちょ、ちょっと魔理沙！アンタノリノリだったじゃない！」
「なんだぜ！そもそも霊夢が」
「だまらっしゃい」
「「はい！」」
ルーミアが一言。こえぇ。超こえぇ。やっぱ人食いだよコイツ。
「で、今回のコトは霊夢企画、主催で魔理沙がゲスト参加、と」
「そ、そおだぜ！私はあんまり悪くない！」
必死の懇願をする魔理沙。やべ、涙目だ。超かわいい。
「イッセー」
「はいぃ！？」
気付けばルーミアがじとっとこっちを見ていた。な、なんだよぅ。
「……この二人どうする？私も一応オンナノコだし、許せることじゃぁないんだけど」
最初の沈黙がすごく痛いよルーミアさん。
「俺は博愛主義者だし、すごく優しいからな」
「許してくれるの！？」
「許してくれるのか！？」
二人の期待と安堵、希望に満ちたまなざし。く、だがそれでは屈しない！主に隣からの視線で！
「二人とも平等に罰を受けるってことで」
それを告げた瞬間、二人の顔が絶望に染まった。
どうでもいいが、こういう顔をかわいいとか思う俺はどうかしてる

んだろうか。

六ページ目（後書き）

更新が亀より遅いと定番のはとです。
申し訳ないです、中途半端に短編とか書きだした私が悪い

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9383f/

東方宵闇帳

2010年10月15日01時55分発行